もっと前へプロジェクト
～いろはゆず丸ごと活用プラン事業～

6班　コミュニティデザイン学科　古俣聡宏　坂田陸　笹原悠生
建築都市デザイン学科　東條有李　松尾萌々夏
社会基盤デザイン学科　大西由起　和田衛
グループ指導教員　中島宗晧

地域名：栃木県宇都宮市上河内地区
地域パートナー：上河内地区まちづくり協議会

背景

上河内地域では江戸時代からゆずが植えられ、材木や地域資源として古くから親しまれてきた。しかしながら、他地域に誇れる資源であるものの、用途も限定され使用量もわずかであり、多くが落果しているのが現状である。人口減少・少子高齢化が進行する状況において、地域の活力を維持していくためには地域の活動力を高めていく必要があり、地域資源であるゆずを活用し、郷土愛の醸成、地域ブランド力の向上、地域コミュニティの再構築などの「地域資産」として新たな価値を創出し、継続的な地域活性化を図る必要がある。

目的

背景と1st cycleの調査から、ゆず農家が地域に存在しないという特徴や既にゆずをほとんど丸ごと活用していることが明らかになり、新たな商品開発は私たちには難しいと考えた。加えて、地域住民のゆずに対する知名度の低さはアンバサダー不足にも繋がっていると考えられるため、地域内へのPRが重要であるといえる。

地域内を中心に、長期的な広報活動の基盤をつくることを活動の目的とした。

方法

1. アンバサダー会議・地域内外のイベント参加
   →地域の状況把握、課題発見

2. コラム作成
   →上河内地区外に住む宇大生の視点から、いろはゆずのHPに掲載するアンバサダーインタビューやゆず収穫、ゆずの活用案についてのコラムを作成

3. アンケート調査の実施
   →いろはゆずの認知度やゆず収穫の意識における調査を実施

日時：2023年12月22日（ほたるの里 梵天の湯にて実施）
回答数：100人
対象者：来訪者を対象に紙媒体で実施

成果（コラム）

私たちの班では今年アンバサダーが作成したHPに掲載するコラムを作成した。これは私たちが学生の目線でアンバサダーの活動やプロジェクトの活動の魅力を発信するために行った。

HPに掲載されたコラム

〈作成したコラムテーマ〉

・アンバサダーさんへのインタビュー・紹介
・ゆず狩り体験の感想
・ゆずの活用(バスボム・あぶり出し)
・プロジェクトを終えて（活動終了後に作成予定）

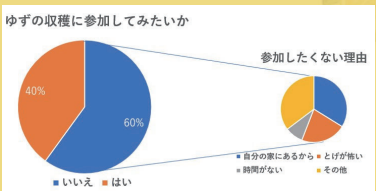
実際のコラムページ

分析結果

〈インタビューからの分析〉
第三者の目線から見たアンバサダーさんの魅力を伝えるため、以下のインタビューを実施した。
・アンバサダーになったきっかけ　・主な活動内容
・活動を通して感じたこと　・今後の目標
→参加して初めて地域内でゆずを活用した活動を行っていることを知ったという声やもっと多くの人に知ってほしいという声が多く集まった。
いろはゆずプロジェクトを幅広い世代に伝える活動が必要

〈アンケートからの分析〉
〇知名度
いろはゆずプロジェクトについて知っているかという問いに対して、地域内で知っている割合は75%。一方で地域外での割合は44.1%だった。地域外よりも地域内の方がゆずプロジェクトを知っていることが分かった。しかし、ゆずを活用した体験教室の知名度が、ゆずゼリーやゆず染め、ゆずパンなどの商品より半分程度であることが分かった。

〇ゆず狩り
下記の図はアンケートでゆず狩りに参加したくないと答えた人の内訳を示している。参加したくない理由は「自分の家にある」と「棘が怖い」が半数を占めてた。「自分の家にある」はゆず狩りに来てもらわなくてもゆずに日常的に触れ、身近に感じていると考えられるため、そのような方にはゆずの活用体験などの企画に参加してもらうことが有効であると考えた。残る理由の中で1/3を占める「棘」に注意を払い、イベントを企画することで、多くの人に興味を持ってもらえると考えた。
イベントの認知度向上、ゆず狩りの魅力を伝える活動が必要



ゆず狩りアンケート結果

ゆず狩りの様子

提案

いろはゆずプロジェクトをもっと前へ進めるために私たちの班から3点提案する。

1. ゆず狩り体験の開催

当初課題になっていた「いろはゆずプロジェクト」の知名度はこのまま活動を継続していくことで向上していくと感じたが、プロジェクトの目的である「地域資産」としての活用に課題が残るように感じた。そこで、食事以外でゆずに実際に触れ、ゆずの存在を身近に感じてもらうことがゆずを「地域資産」として活用していくために必要であると感じたため、ゆず狩りの開催を提案する。ゆず狩りを開催することで地域内外を問わず様々な人が交流することのできる新たなコミュニティの構築が期待される。

2. 地域の小中学生がゆずに触れる機会の創出

地域資産として継続的な地域活性化を図っていくためには若者の活動への参加が重要になってくると考えられるため、地域の小中学生がゆずに触れる機会を創出することを提案する。ゆずにより多く触れ、愛着をもってもらうために収穫から加工・使用までを一貫して体験できるプロセスは、子供を通して親世代にも知ってもらえるきっかけになると考えた。アンケートの際に地域の方からお話を伺い、独自の調理法や活用法をしている人も多くいたため、実際に教えてもらうことで多世代交流を図り、地域コミュニティを構築することも可能であると考えた。

ゆずに触れる機会案

3. コラムの継続

ゆず染めやゆずの活用法など地域にあるゆずを活用するためのコラムやイベントの魅力を伝えるコラムはHPにあると魅力的であると思ったので今後も継続してほしいと思った。また地域の小中学生と連携をしてこのHPを活用していくのも面白いのではないかと考えた。